

① 厳戒態勢の中での韓国入り

2018年2月11日、フィギュアスケートのメイン担当記者たちは、カンセン江陵駅から「KT X（韓国高速鉄道）」でインチョン仁川国際空港の到着ロビーに向かっていた。

同じ列車や前後の列車に、他社のフィギュア担当の記者や五輪取材で現地入りしている社会部などの記者たちも乗っていた。

羽生選手がこの日、日本オリンピック委員会（JOC）からの発表で、練習拠点のカナダ・トロントから韓国入りするという情報もたらされたからだ。

約3カ月前のNHK杯で右足首を負傷して以後、羽生選手が公の場に姿を見せるのは、このときが初めて。すでに、団体戦を回避することが決まっていた羽生選手は、ここから数日間連覇がかかる個人戦にすべてを集中させることになる。

空港に着いたメディアはトロントからの直行便の到着時間に変更が生じていないかをチェック。午後5時前の到着に際し、空港ゲートに駆けつけたのは日本の「羽生番記者」だけではなかった。海外メディア、さらには大勢のファンでごった返していた。

空港に降り立った羽生選手は日本代表の公式ウェアに身を包んでいた。紺色ジャケットの左胸には日の丸と五輪マークが縫い付けられていた。

羽生選手にとっても、長い沈黙の時間は忍耐の連続だったはずだ。当初は回復まで3、4週間とされた予定は大幅に遅れ、痛みも思うようには引かなかった。

NHK杯以降のすべての試合を欠場せざるを得なかった。ソチ五輪以降、休養を挟むことなく、幼少期からの目標だった「五輪連覇」へ突き進むはずだった羽生選手の必勝プランも大きく狂っていたはずだ。

本来なら、年末年始は全日本選手権後につかの間の休息がとれるはずだった。いつものシーズンならトロントでサポートする母とともに日本へ一時帰国し、父と姉が待つ故郷の仙台で家族団らんの時を過ごすことができた。

しかし、今回は長旅が患部に悪影響を生じさせる可能性を懸念して、トロントに残る決断を下していた。

羽生選手は空港内で取材に応じてくれることになっていた。日本選手団の関係者が羽生選手に寄り添うように歩く。JOCスタッフたちが「動線の確保」に努め、平昌五輪のロゴが入った青のロープで規制線が張られた。

できる限り、最前線でICレコーダーを向きたい。しかし、メディアが押し合って、負傷明けの羽生選手に接触するような事態があつてはならない。

日本選手団の関係者らが厳戒態勢でガードする中、羽生選手の「即席」による記者会見が始まった。

——負傷した右足首の状況を、ケガをしてからどんな練習をしてきたかを教えてください。

「出られない試合もたくさんありましたし、非常にもどかしい気持ちでもいましたが、できることとして陸上のリハビリや治療を必死にやってきました。実際に試合の場に来られたことを嬉しく思います。これから、しっかりと調整して試合に向けてやっていきたいと思つています」

——連覇への意識は？

「自分にうそをつかないのであれば、やはり2連覇したいと思つています。ただ、それが目的ではありません。しっかりと自分の演技を出しながら、このオリンピックをしっかり感じていきたいと思つています」

——オリンピックで予定する4回転のジャンプ構成については？

「現地で調整をして、それから決めようと思つています。(ジャンプ)構成の選択肢はた

くさんあります。周りの状況とかもいろいろと考えながら、しっかりと作戦を立ててやっていきたいです」

——現在のコンディションは？

「まだ滑っていないのでわかりません。ただ、団体戦も見ていましたけど、（自分は）どの選手よりも、勝ちたいという思いがいちばん強くあると思っていますし、どの選手よりもピークまで持っていける伸びしろがたくさんある選手の一人だと思っています」

報道陣が羽生選手に確認したかったことは、おもに5点あった。

「ケガはどこまで回復しているのか」「この間にどんな練習をしているのか」「4回転を含むジャンプ構成はどうなっているのか」「現在のコンディションは」。最後に、「五輪の位置付け」である。

羽生選手は五輪本番で勝つための「具体的な戦術」をオブラートに包み、それでいて、メディアの質問の趣旨を理解した上での確かな回答を述べた。

その上で五輪の連覇に関しては、「それだけが目的ではない」としつつも、「2連覇したい」と明言し、関係者が用意した車へと乗り込んだ。

② 僕が金メダルを獲ってみせる

韓国入りした羽生選手の初練習は翌2月12日夜だった。五輪会場の江陵アイスアリーナではなく、アリーナ地下に併設された練習用リンクである。

通常のアリーナよりも屋根が格段に低く、関係者が着席できるベンチの数も限られていた。

羽生選手は田中刑事選手らと同じ組でリンクに登場した。静寂に包まれた会場で、記者たちはノートを片手に羽生選手の動きをくまなくメモすべく、ペンを走らせた。プログラムの曲がかかっている序盤には、カメラマンの無数のシャッター音も響いた。羽生選手はそんな雰囲気の中、負傷後初となる公の場での練習をスタートさせた。

極論を言えば、たった一つの転倒がケガの再発を引き起こしかねないほど緊迫した中で調整が求められていた。そんな中、羽生選手は、左右の足に重心を交互に乗せ換えながら、ゆっくりとしたスケートティングから練習をスタートした。

その後のジャンプは、慎重に取り組んでいるのか、プランどおりなのかは推し量ること

ができなかったが、アクセル以外の5種類のジャンプは8本のうち、7本が1回転だった。2回転がトウループだけで、3回転は最後に跳んだ得意のトリプルアクセルだけだった。

1回転のトウループから跳び始め、2回転トウループを降りたあと、サルコウを1回転で2度跳び、フリップ、ルッツをいずれも1回転で1本ずつ着氷させた。その後、1回転ループを2度跳び、シングルアクセルを挟んでトリプルアクセルで締めた。

最後のジャンプは負傷した右足でこらえるように降りた。転倒は一度もなし。入念に氷の感触を確かめるように、ジャンプを計10本跳んだ羽生選手は、曲かけ練習が始まる前に、早々と練習を切り上げた。ゆっくりと体を氷になじませつつ、わずか15分という異例の短い調整だった。

羽生選手は、翌13日に単独での記者会見を予定していたため、練習初日のこの日は取材が設定されなかった。羽生選手は練習を見守った報道陣の前を通過して会場をあとにするとき、「お疲れ様でした。ありがとうございます」と、負傷前と変わらない丁寧な対応をしてくれていた。

会見を午後控えた翌日の五輪リンクでの公式練習では一転、4回転ジャンプをきれい

に跳ぶなど、3日後に迫る本番に向けて順調な回復ぶりを印象づけた。40分間の枠をフルに使った調整。オーサー・コーチらが見守る中、最初は前日と同様にゆっくりと体を氷にならしていった。中盤からは3回転ジャンプを跳び、その後に4回転トゥループと4回転サルコウを決めた。ギアが一段上がったようだった。

そして、五輪リンクにあの曲が流れた。フリーの勝負曲、『SEIMEI』だ。演技後半の見せ場でもある4回転サルコウ→3回転トゥループ、そして4回転トゥループを含んだ3連続ジャンプも次々と決めた。

羽生選手が4回転を跳び始めたのは、わずか2週間ほど前だったという。驚異の回復力と卓越した氷上への順応性が、本番リンクの最初の練習でここまで高い精度の滑りへとつながっていた。リンクサイドに戻ると、オーサー・コーチに親指を立てて好調な状態を伝えていた。

羽生選手は公式練習後、会場内に設けられた記者会見場に姿を見せた。

会見の冒頭に自ら口を開いた。

「ケガをしてから、スケートを滑れない日々を過ごしていましたが、今日、無事にオリンピック会場のメインリンクで滑ることができて嬉しく思っています。もちろん、まだ気を

緩めるつもりはありません。しっかり集中して、できることを一つずつやっていきたいと思っています。それから、ケガをして苦しい時期、たくさんの応援メッセージをいただきました。みなさんからいただいたメッセージの力も借りて演技につなげたいと思います」

そして、五輪の本番リンクで滑った感触について、「四大陸選手権のときもそうですが、非常に感覚がいいですね」と手応えを口にした。羽生選手はスケートができない時期、四大陸選手権の映像や公式練習時の状況を思い出しながらイメージトレーニングを重ねていた。1年前に五輪会場で滑った四大陸選手権の経験が、重要な意味を帯びていた。

「まだやっていないジャンプやエレメンツはたくさんありますが、自分の中では（本番に向けた調整に）計画があります。個人戦にピークが合うように、しっかりやっていきたいです」

照準は個人戦での連覇に絞り、覚悟もできているようだった。

NHK杯の公式練習で転倒し、右足首を負傷してからは、一度も公に滑っているところを披露することがなかった。ぶっつけ本番で連覇をかけた平昌五輪のショートが2017年10月のロシア杯以来、約4カ月ぶりの実戦になる。ショートはこの時点で最終の第5組の1番滑走になることが決まっていた。4年前のソチ五輪は第4組の1番滑走で、100

点超えをマークしている。流れは悪くない。

羽生選手がショートに挑む前、他競技も含めた日本選手団は、この大会でまだ金メダルを一つも獲得できていなかった。前日練習を終えた羽生選手は取材を受けるミックスゾーンで、そのことを問われると、「いえ、とくにないです」と言ったあとに力を込めた。

「誰が獲ろうが、僕も獲ります！」

③ 渾身のショート、鍵を握った4回転サルコウ

2018年2月16日。羽生選手は濃い紫を基調としたフェンスに覆われた江陵アイスアリーナのリンクに立っていた。

平昌五輪の男子ショート本番。演じるプログラム曲は2シーズンぶりで、自身も「大好き」と話すシヨパンの『バラード第1番』だ。

ピアノの旋律に乗って世界歴代最高得点を塗り替えてきた必勝のプログラムで、いよいよ五輪連覇への道が始まった。

会場内の至るところに、英語表記「PyeongChang 2018」、そして、五輪のマークが目立

つように配されていた。

五輪を取材するのは、世界各国のテレビ、ラジオ、新聞、雑誌などの記者たちだ。「取材パス」が発行されたメディアしか、取材は許されない。セキュリティでは顔認証が行なわれ、テロ対策などを兼ねて、厳重な警戒が敷かれている。

会場内には「記者席」が設けられ、本来は取材パスがあれば、取材が可能ではあるが、羽生選手の連覇がかかる男子フィギュアはこの大会で随一というほどの注目を集めていた。このため、希望するメディアの数が記者席数を上回る可能性が高く、あらかじめ制限がかかっていた。

日本オリンピック委員会（JOC）を通じて、日本メディアはほぼすべての社が1枚をなんとか確保するのが精いっぱいだった。観客の入場チケットだけでなく、記者席に入るための取材パスもプラチナ化されていたのだ。

羽生選手のショート、もっと言えば「五輪連覇」の行方は最初のジャンプである4回転サルコウにかかっているというのが、筆者の見立てだった。

約4カ月ぶりの実戦で跳ぶ最初のジャンプゆえに、流れを大きく決めると考えていた。実際、「最初の4回転サルコウが決まれば、羽生選手は乗っていける」と話す関係者も

いた。

本番当日の朝に行なわれた公式練習で、羽生選手は10本続けて4回転サルコウを試みていた。序盤は安定感を欠いていた。しかし、百戦錬磨の絶対王者は自らの修正ポイントを知り過ぎていた。最後の4本を続けて着氷させて、本番への臨戦態勢を整えた。

迎えた本番のジャンプは完璧だった。わずか1カ月ほど前まで、氷の上に立つことができなかったということが信じられないほどのパフォーマンスだった。

演技冒頭で鮮やかに降りた4回転サルコウは、当時3点満点だったGOE（出来栄評価）で2・71点を獲得するほど高いクオリティで決めた。残る2つのジャンプは基礎点が1・1倍になる後半に並べた。得意のトリプルアクセルを難なく決め、4回転→3回転の2連続トゥループは3回転で難度を高めてGOEを稼げるように両手を上げて跳んだ。トリプルアクセルで満点の3点、連続ジャンプで2・57点のGOEを上積みした。

演技終盤は複雑なピアノの旋律に乗ってステップを刻み、スピンドルで魅了した。ぶっつけ本番で迎えた五輪とは思えないような庄巻の演技だった。

羽生選手の演技に、観客の視線も釘付けだった。観客席のあちこちで日の丸が揺れ、アリーナは大歓声に包まれた。

4回転サルコウは連覇の鍵を握る大事なジャンプでもあった。シヨートで4回転ループではなく4回転サルコウで勝負することを想定したのは、勝つために練られた戦略だった。同じ4回転でもループに比べて、サルコウの基礎点は1・5点下がる。それでも、羽生選手のきれいなジャンプはGOEによる加算というアドバンテージを得られる。

振り返れば、このシーズンの初戦だった17年9月のオータム・クラシックでは冒頭の4回転をループではなくサルコウで跳び、112・72点の世界歴代最高得点を塗り替えてもいた。

だからこそ、4回転サルコウを選択しても、勝つための自信は少しも揺らいではいなかった。



羽生選手が牽引してきた男子フィギュアは、この4年間で飛躍的にレベルが上がった。4年前のソチ五輪のシヨートで、羽生選手は世界で初めて100点台の太台に乗せた。五輪での大台突破は羽生選手だけだった。今回は、その背中を追ったスケーターたちが100点台に乗せてきた。しかも3人も。ハビエル・フェルナンデス選手が107・58点で2位、宇野昌磨選手が3位で104・17点、ボーヤン・ジン選手が4位で103・32点。

一方、優勝候補の一角とされたネイサン・チェン選手は、82・27点で17位と大きく出遅れた。これが、五輪の怖さでもある。

そして、1位は111・68点をマークした羽生選手だった。圧倒的なスコアで2位に4点差以上をつけて、頭一つ抜き出た。五輪のリンクを完全に支配した王者の舞だった。

「今日の朝、曲をかけたときに（4回転）サルコウを失敗しちゃって、若干の不安がありました。調整法も含めて、（右足首の負傷によって）練習ができない間、いろいろと書籍や論文などでも調整法を勉強していました。そういったものが出せてよかったなと思います」

土壇場で漕ぎつけた4回転サルコウの修正は、ケガの影響と決して無関係ではなかった。韓国入り後の公式練習でも、ジャンプを納得いくまで跳ぶことはできなかった。

「ずっと本数制限もやっていたので、身体が動いていない部分だとか、脳みそが覚えていない部分とかいろいろあったと思います」

その中で、知識を呼び起こし、感覚を蘇らせていく。羽生選手は「その部分をちよっと刺激してあげるような感じでやってきました」と、いともたやすく修正したように振り返ったが、それを可能にしたのがたゆまぬ努力に裏打ちされた「王者の経験値」だった。

「練習どおりに、自分の身体が覚えていると思っていました。それはサルコウだけでなく、トウループも、アクセルも。ほんとに何年間もずっと一緒に付き合ってくれたジャンプなので。そういった意味では感謝をしながら（本番で）跳んでいました」

シヨートに組み込んだ3種類のジャンプへの自信をのぞかせた。

もう一つ、約4カ月ぶりの実戦でのほぼ完璧な演技を後押ししたのが、会場の雰囲気だったという。

「今日はブライアンも（リンクサイドに）立ってくれていて、ジスランも立ってくれていました。何よりも、久しぶりにみなさんの声援を聞くことができて、『ああ、帰ってきたんだな』と思っていました。スケートを滑る幸せな感じを久しぶりに試合で味わうことができました」

演技での緊張はなく、心地よい空間に身を置いていたという。

「滑り終えたとき、とにかく満足という気持ちがいちばんですかね。得点に関しては、とくに何も思っていないです。得点とかそういうことではなく、今日の自分のコンディションの中でできることをやったなと思っています。あとはまだ、明日（フリー）があるという気持ちが頭の6割近くを占めているので、しっかり明日に向けて調整したいなと思って

います」

ショートで羽生選手は実戦の「ブランク」という不安要素を一つ打ち消した。フリーでは、もう一つの「不安」を打ち消す作業が待っていた。それが、スタミナである。

ショートの演技時間が2分40秒であるのに対し、当時のフリーは4分30秒。ジャンプも8本跳ばなければいけなかった。心配されていた「不安」は、そのために必要な演技のための体力をどこまで回復させているか、という点にあった。

実際、ケガをしてから氷上での練習を再開した18年1月まで、スケート靴を履いて氷に立つ感覚を確かめることができなかった。それは紛れもない事実だった。

しかし、羽生選手は氷に立てない時間を無駄にはしていなかった。トロントで過ごした約3カ月。羽生選手がショート後の会見で口にしたように、書物に目を通して調整方法を理論立てることも一つだっただろう。さらには、氷上でできないなら、足の負傷で下半身への負担をかけることができないなら……と頭をめぐらせ、自分にできることと向き合っていた。

氷上に立てなくても、ショート、フリーの曲を流し、上半身だけの動きを繰り返した。筋力の衰えを抑え、維持していくためにゴムチューブなどを使ってインナーマッスルを鍛

えてきた。残るフリーは、その成果を発揮するための舞台だった。

そして、シヨートを終えた時点でトップに立った羽生選手は、金メダル獲得の「懐刀」を手にした。それが、4回転ループだ。

シヨート後に行なわれた上位3選手による記者会見で、フリーで何本の4回転ジャンプを跳ぶかを問われた羽生選手は、「明日（フリー）のことについては、まだしゃべるつもりはありません」と煙に巻き、4回転ループ投入の有無はベールに包んだ。賢明な選択だったといえる。

フリーのジャンプ構成は五輪連覇の鍵を握る。簡単に明かすわけにはいかない。

もしも、フリーで4回転ループを跳べば、基礎点が上がる。シヨート1位の羽生選手の基礎点は、2位以下の選手たちにとって、金メダルを狙う上で意識せざるを得ないものである。羽生選手が韓国入りして以降、報道陣も羽生選手がどんなジャンプ構成で五輪本番を迎えるかは、大きな注目点だった。韓国入り後も、何度か「4回転ループ投入」について質問が出たが、羽生選手は真正面から答えることはしなかった。

当然だろう。羽生選手が最初から「4回転ループは跳ばない」と宣言すれば、ライバルたちは楽な気持ちで大会に臨めたはずだ。フリーでの投入の有無がわかれば、逆転のシナ

リオも描きやすくなる。自らの演技構成も落として、ミスが少ない演技で勝負するなど、戦略を立てることができている。だからこそ、4回転ループに関してだけは、口を固く閉ざしていたのだろう。

振り返れば、羽生選手が4回転ループを初めて組み込んだのは、平昌五輪のプレシーズンにあたる2016-17年シーズンだった。

その前年シーズンまでのプログラムに入れていたのは、金メダルを獲得したソチ五輪と同じくトゥループ、サルコウと2種類の4回転のみ。それでも充分だったが、さらなる得点の上積み、さらなるレベルアップのために取り組んだのが、4回転ループの実戦投入だった。

羽生選手は「ジャンプ」と「芸術性」というフィギュアスケートのプログラムにおける評価を二者択一してこなかった。どちらも積み上げることによって「絶対王者」であり続ける道を選び、五輪シーズンではさらに自身4種類目となる4回転ルッツまで投入した。

世界のトップに立ちながら、足踏みはしない。若手が多種類の4回転で背中を追いかければ、自身の強みであるスケートティングや表現面での優位にあぐらをかくことなく、4回転の種類でも競い合ってきた。

その努力が、平昌五輪のフリーという最後の勝負を前に成果として表われた。王者が懐に忍ばせた4回転ループは、逆転を狙うライバルたちに大きな重圧をかけることになったのだ。

④周到に練った連覇のシナリオ

ドンッ！

江陵アイスアリーナに響く和太鼓の音に合わせるように、羽生選手が両手を広げた。フリー『SEIMEI』のフィニッシュポーズだ。

世界歴代最高得点を2度も塗り替えた伝説の名プログラムで、映画『陰陽師』の世界観をリンクに描き出した。

羽生選手の額には激闘を物語るように汗がにじんでいた。左手をすつと下ろし、天高く突き上げた右手の人さし指だけを立てた「1」が優勝を確信しているようだった。そして、すべてを出しきった23歳の王者は人目をはばからず、泣いたのだった。

4年前のソチ五輪は同じくショート1位ながら、フリーのジャンプで2度の失敗があ

試し読みはここまでです。続きは書籍でご確認ください。